トルステン・デッカート著，大森安恵・成田あゆみ訳
『ハーゲドン 情熱の生涯 ――理想のインスリンを求めて――』
…… 藤倉 一郎 313
酒井耕造著『近世会津の村と社会 ――地域の暮らしと医療――』
…… 竹原 万雄 314
梅渓 昇著『続 洪庵・適塾の研究』…… 小田 晧二 315

投稿規定…… 318
編集後記…… 320

《本号の表紙絵》

ジャン・コクトーの「輸血の皿」

この皿絵はジャン・コクトーの真作で，マドリーヌ・ジョリ工房で焼かれた100枚中の第15号である．1961年にフランス国立輸血センター所長スーリエ博士から緒方富雄先生へ贈られた素焼の作品で，緒方先生が苦労して日本へ持ち帰られ，しばらく所蔵されていたが，1984年に日本赤十字社へ寄贈されている．

緒方先生の解説によると，「だきあっている男と女との口と口のあいだを，あやしげな5本の管がかよっており，管のなかには赤い点が一列にならんでいる．背景には毛細管をおもわせるようなアミが青色にかかれている．男の後頭部に，下から上へ“qui donne s’enrichit”（与えるものは，ゆたかになる）としるされている．輸血をあらわしたもので――中略――さすがにジャン・コクトーのひらめきといえよう.」と結んである．

緒方先生は，ときどきこの皿をじっと見つめ，コクトーの生命がすぐ目のまえにあるのを感じて，身のひきしまるおもいがするし，そこにむきだしにあらわれているかれのまえにいるのが，こわくなってくるときさえあるとも書いている．

（K.Kヤトロン創立25周年記念「けんさ」特別号 第1～2頁，1987年より）

（中西 淳朗）